

情報探索行動における
ソーシャルキュレーションの利用に関する研究
A Study of Social Curation Use in Information Seeking Behavior

学籍番号：201421591

氏名：武田 将季

Masaki TAKEDA

Web 探索の困難を軽減する手段として、ソーシャルキュレーションに着目した。本研究ではソーシャルキュレーションを「特定の主題に関して Web ページへのリンクや画像、動画、ソーシャルメディア等のコンテンツがキュレータによって評価・選択・配列された上でまとめられて公開されているもの」と定義する。

本研究では、Web 探索においてソーシャルキュレーションを利用した場合、探索者の行動様式及び精神的負荷や集中の度合いが、サーチエンジンを利用した Web 探索に比べて、どのように変化するのかを明らかにすることを研究目的とする。精神的負荷や集中の度合いの計測にあたっては、内観手法に依らず、脳波及び瞬目といった生理的指標の利用を試みた。具体的な研究手続きとしては、30 人の実験参加者をソーシャルキュレーション利用群とサーチエンジン利用群の 2 群に分割し、それぞれに収束型と拡散型の 2 種類の性質が異なる情報探索タスクを遂行してもらい、行動及び脳波・瞬目を記録した。

その結果、両群は 1) クエリ投入、2) 検索結果一覧ページを起点とした探索、3) まとめ/Web ページを起点とした探索、4) レポート執筆、を繰り返し行うことでタスクを遂行している点で共通していた。しかし、ソーシャルキュレーション利用群はまとめページの内容や構造をコピーしてレポートを仕上げ、記入した内容に対する追加等を行う場合は引用元ページを参照していた。一方、サーチエンジン利用群は内容を取捨選択して少量ずつレポートに記入し、新たにクエリを投入することで内容の修正や追加を行っていた。他にも、詳細な行動様式は両群で異なっていた。研究目的に対しては、ソーシャルキュレーションを利用することでタスク中の行動が単純化され、精神的負荷が低い状態であるとの結論を導くことができた。一方で、ソーシャルキュレーション利用群は集中の度合いが低かった。今後は、情報探索行動における集中度の低さをどのように解釈するべきか、探索者の知識構造やメンタルモデルを考慮して検証して行く必要がある。

研究指導教員：歳森 敦

副研究指導教員：松林 麻実子